

第2回課題別学校間交流 兼 小中一貫・連携実践交流会



12月1日(金)、各校の学習評価担当者にご参加いただき、稚教研と共催で表題の交流会をオンラインで開催しました。

稚教研主催で行われた第1回課題別学校間交流は、「学習評価の検証・改善」がテーマでした。グループ協議後の全体交流で、グループから共通に出されていたのが、「主体的に学習に取り組む態度の評価をどのように行ったらよいか」「評価・評定に関わり、学校間の評価やカッピングポイントにばらつきがあるが、中学校、あるいは稚内市として統一する必要があるのか、ある程度統一に向けて推し進めていく必要があるのではないか」という2点でした。また、教育研究所運営委員会においても、「評価規準・基準について中学校の先生方と意見交流をしたい、機会を設けて欲しい」という要望が出されていました。

市内校で評価・評定に大きなばらつきがあることは望ましくないわけですから、学習評価・評定の客観性や信頼性をどのようにして高めるのかということについて交流し、論議することは非常に重要なことで、それは小学校においても同様です。

そこで、本交流会を下記の内容で実施しました。

【実践発表】「観点別学習状況の評価『主体的に学習に取り組む態度』の評価について」

稚内東小学校 教諭 新しかたちの学び授業力向上推進委員 杉本 淳子先生

【校種別グループ交流・協議】

《柱1》「主体的に学習に取り組む態度」の評価

《柱2》「評価・評定の妥当性や信頼性を高める取組」

今号では実践発表や交流内容の概要、事前に実施した学習評価に関するアンケート結果(裏面)を報告します。杉本先生が作成されたパワーポイント資料(ノート付)を教育研究所のクラスルームに掲載させていただきます。紙面の都合で紹介できなかった内容や参加者から事前にいただいた質問に対する回答を見ることで、学習評価に対する理解がより深まりますので、是非、ご覧ください。

小学校グループ ～【司会】渡邊 友和先生(南小)

●「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法について

- ・ 評価方法として、「個別-協働-個別」・「課題-まとめ-振り返り」という学習過程における学びの様子を記録化したもの、ノートの「振り返り」、「振り返りシート」、テストに掲載されている「主体的」に関する項目、パフォーマンステスト、提出物などを評価資料として、学習の理解度や思考の深まり、変化を見取り評価している。また、ロイロノートを活用し、「自己調整」「変化」を見取るための取組がなされている。学習評価での活用という視点からもロイロについて研修が必要。
- ・ 「児童生徒自身が課題を見つけ、学びの意義や目的を見出し…」学ぶところが主体的な学びの評価につながるが、そのような授業が進んでいるとはいえないところがある。研修を深めながらそのような授業づくりが進むようにしていきたい。また、「子ども自身が課題を見付ける」という点ではロイロノートなどICTを活用に期待できることがある。
- ・ 指導計画には評価規準の文言は掲載されているが、具体については学年や担任の判断任せになっているところがある。「主体的、思・判・表」について学びの姿、教科のゴールの姿を具体化して、教員や保護者と共有することが大切である。
- ・ 学びの地図、シラバスづくり(単元のゴール、どのように学んでいくか)に取り組み始めている。(情報共有を望む声、多数)

●カッピングポイントなどについて

- ・ 「カッピングポイント」は学校として設定しているが、その根拠は明確になっていないのが実態としてある。
- ・ 市内校でカッピングポイントを統一し、児童の実態に応じて難易度のテストを選択したりカッピングポイントに幅を持たせたりしながら評価をしていくということも考えられる。数値化できない教科の学びの姿、ゴールの姿についても交流・共有し、共通の基準ができると良い。

【実践発表】主体的に学習に向かう態度の評価について 稚内東小学校 教諭 杉本淳子氏

平成29年の学習指導要領の改訂により、知識・技能、思考・判断・表現力、主体的に学習に取り組む態度の3観点になった。東小では、適切に評価ができていないのかと問い直し、評価について改めて学ぶ一年に位置付けて取り組んだ。

主体的に学習に取り組む態度の評価は、粘り強く学習に取り組もうとする側面と自らの学習を調整しようとする側面、二つの側面を評価することが求められている。(下記の)㉠のグラフおよび説明文を読み解くと、普段の授業がどうあるべきなのか、考えさせられる。注目すべきは、緑線の文言。㉠の粘り強い取り組みを行う中で、自らの学習を調整しようとする側面。粘り強く取り組む場面を、45分の学習できちんと位置づけているのか、もしくは単元を通して、意図的に位置づけることができているのか、そのような課題を意識しているのか、問われる。同時に、子どもたちが自ら学習を調整できるような場面や時間、課題を、単元を通して適切に設定することができるのか。自ら学習を調整しようとするベースにある自分の学習状況を把握できるような適切なフィードバック、試行錯誤する場面設定がなされているのか。個別最適や、カリキュラムマネジメントといったことが、授業改善に不可欠なキーワードとなるという、納得できる一例だと思ふ。

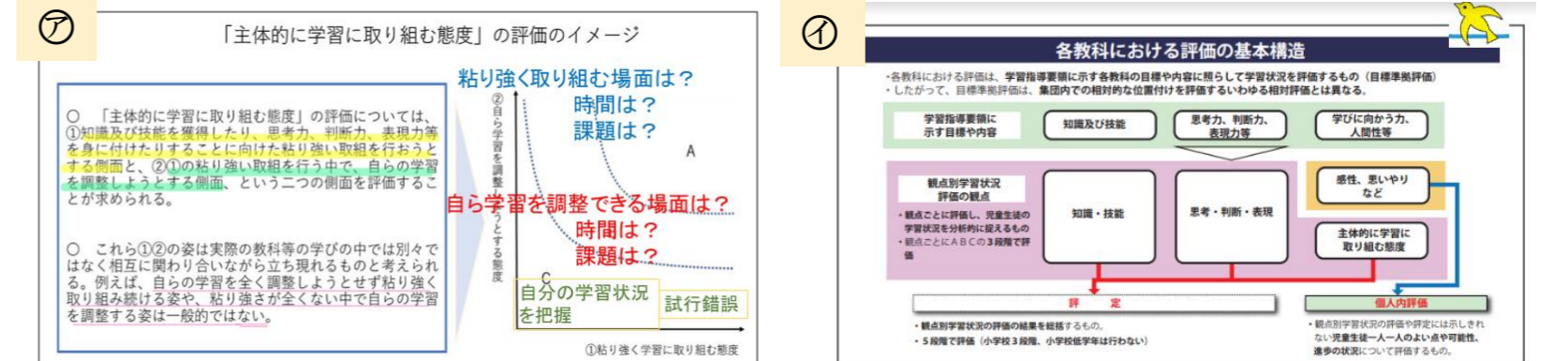
また、粘り強さと学習の調整でみると、Bのラインにより近いのは学びの調整の側面。ということは、学びの調整をする方法やそのあるべき姿を子ども達と共有し、学びの調整をしようとする態度を育てていくことを私たちは意識して行うのが大事になってくると言えるのではない。

(下記の)㉡、文科省の資料を、先日の稚教研大会に向けた指導案検討で改めて解きほぐすことになった。というのも、「わかったこと、がんばったこと、もっとしりたいこと」のわがしという合い言葉でふりかえりを行う学年が多い東小。3年生算数で、言葉による振り返りをしているから、主体の評価の一部として活用してみよう!という提案授業を組み立てた。しかし、この合い言葉の視点は算数における主体の評価として活用してよいものなのか……結局、ただの「がんばった」は観点別学習状況の評価にはなじまない。一方で、このわがしの視点が振り返りとしてだめかという、そうではない。ふり返りで頑張ったことを書く児童がいたら、それを見取り、「あなたは今日、頑張ったんだね!こう頑張っていたもんね!」とフィードバック、つまり教科として評価・評定に活用しなくても、人を育てる評価として活用できる、と確認することができた。

では、実際に教科としてどんな姿が主体的に学習に取り組む姿なのか。算数科において、「よりよく問題解決しようしたり」とはどんな姿か。例えば5年算数 割合の単元。主体の評価規準。東京書籍の評価規準例によると、大体の単元は同じで、「過程や結果をふりかえること」「多面的に捉え」「よりよいものを求める」がキーワードといえる。

まとめとしては、付けるべき力を意識した授業改善を行えているのか、今一度確認が必要だということ。自己選択できる個別最適、習熟度学習の一環であるカフェ型なども、ヒントになるかもしれない(稚内グループ通信29号参照)。3観点は、それぞれが独立しているわけではない。

この後、教科書改訂に関連して行われる教育課程編成作業に生かすことができれば、この後の子どもたちによりよく生きていく力を付けることができるのではないだろうか。



中学校グループ ～【司会】道心 博生先生(潮見中)

●カッピングポイントなどについて

- ・ 各校の実態が違うので、稚内市としてカッピングポイントを統一するには難しさがある。高校入試のランクに関わるので、「評定」に各校のばらつきがあるのは望ましくない。
- ・ 各校の指導計画においてB規準の学びの姿を具体的にし、先生方で共有することが重要。規準の姿が通う学校によって違いがあってはならない。指導要領に則った規準を設定する必要がある。

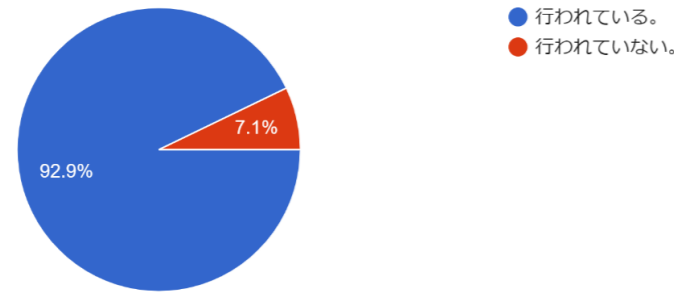
●「主体的に学習に取り組む態度」の評価について

- ・ 評価方法として、学習の振り返り(記述、フォームの活用)、イメージ図、レポート課題などを活用。ペーパーテストに「主体的」に関する項目を盛り込むことに取り組んでいる。また、各授業のポイントを生徒に示している。
- ・ 粘り強く、難しい学びを調整しながら取り組んでいる、という思考の連動性を見取り評価する必要がある。「頑張っているからA」は違う。体育の短距離走を例にすると、「短距離走で、誰よりも練習して走った、頑張っていて取り組んでいた」は、「関心・意欲・態度」の評価では「A」であった。「主体的」は、「足が速くなるポイント、技ができるようになるポイントを比較して改善点を見付けたり探したりする。見つけた改善点に従って練習をした(調整をした結果、改善が図られている。続けて行った結果、調整がうまく行って良くなっている。よく考えて改善を図っている)」など、具体的に繋がる事実、客観性のあるデータや数字を見て評価することが求められている。このことから、観点別学習状況の評価が「C(知・技)、C(思・判・表)、A(主体的)」というのは考えにくい。そうならないよう指導の充実を図ることが必要である。
- ・ 稚内市として、「主体的」と「関・意・態」の違いを皆で理解していくことは大事である。また、評価方法を交流したり見取りの具体例を収集したりすることができると良い。

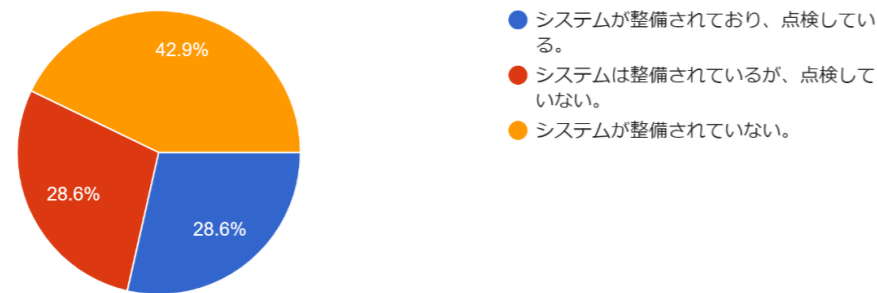
学習評価に関する事前アンケート結果(回答数 14 校)

1. 学習評価の妥当性と信頼性を高める工夫について

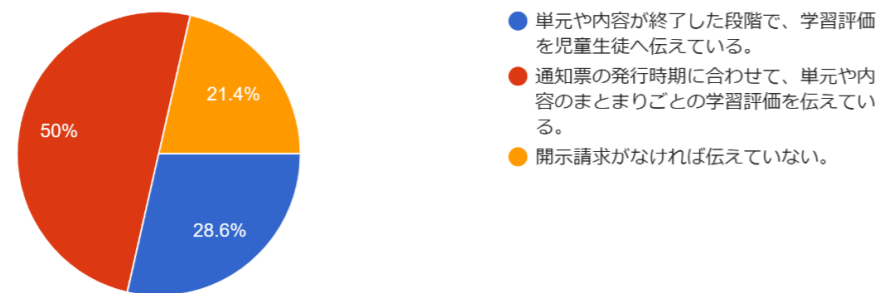
(1) 学習指導要領に基づいて、単元や内容のまとまりごとに学習評価は行われていますか？



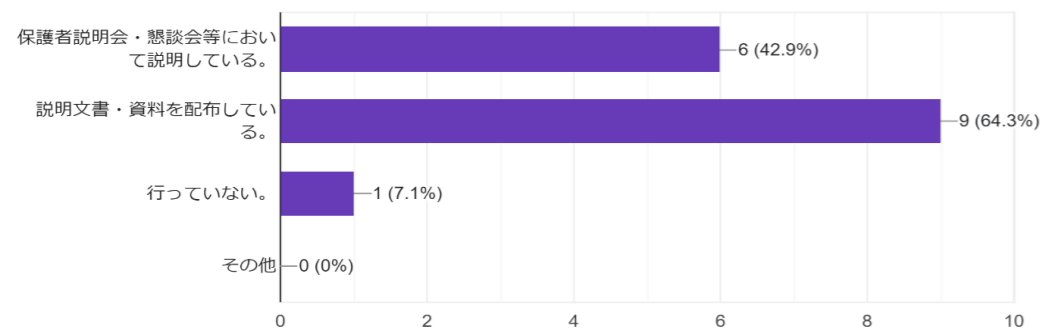
(2) 単元や内容のまとまりごとに行われた学習評価を点検できるシステムはありますか？



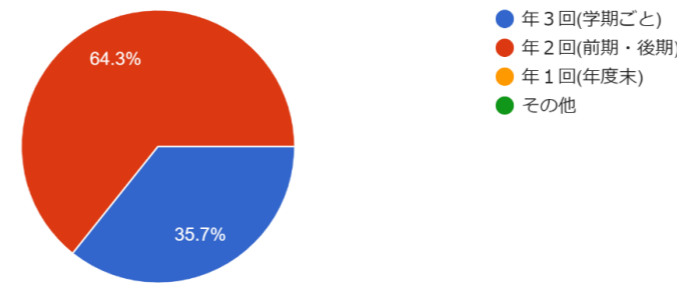
(3) 単元や内容のまとまりごとの学習評価を見守る児童生徒及び保護者へ伝えていきますか？



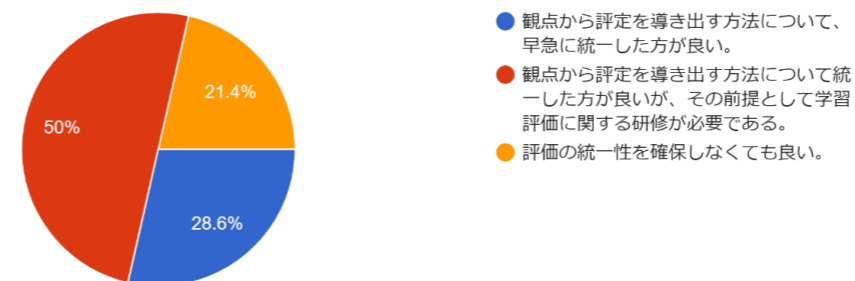
(4) 保護者に対し、学習評価に関する仕組み(評価基準や評価方法など)について事前に説明したり情報発信を行ったりしていますか？



(5) 通知表の発行回数は何回ですか？



(6) 現在、観点別評価に関しては国の参考資料がありますが、観点から評定を導き出す方法については各学校の裁量に任されているため、評定に関しては評価の統一性が確保されていない状況となっています。稚内市におけるこの状況の改善に向けて、考えをお聞かせください。



(6)についてご意見がございましたらお書きください。

- ・ 細かな文言や観点別の重み、カッティングポイントなど校種・教科・指導計画によって違いが生まれて当然である。統一が悪い形での「しぼり」とならないならば、統一しても良い。「具体例」として例示することは行った方が良い。
- ・ 何が統一されていないのか分からない。また、何を統一したいのか分からない。
- ・ 達成率と評定との相関は統一した方が良い。
- ・ 6月の学校間交流で、学校によりカッティングポイントが違うことがわかりました。研修で深めていけたらと感じています。



【事後アンケート】「この研修で理解が深まったことや参考になったこと、感想等」から抜粋して紹介させていただきます。

*お忙しい中、ご協力ありがとうございました

- 主体的に学習に取り組む態度についての評価の在り方
- 評価方法については、具体例を学び合いながら、共通して取り組むべきことだと思います。
- 他の学校の評価の仕方や取組などを聞くことができて大変参考になりました。全てを統一することは難しいですが、やはりある程度は市内で評価基準やカッティングポイントを揃えないと、学校の格差ができてしまえば良くないので、もっとこのような研修を深めていく必要があると感じました。
- 評価を実施する際に、カッティングポイントの統一についてはこだわりすぎる必要はないと感じたが、各評価の生徒像については各校で共通のイメージ(指導要領の見直し)を共有する必要性を改めて感じた。勤務校以外の方と話すことができるのは、新しいことを知ることができたり、知っていることの再認識になったりするので、勉強になりました。
- 理解が深まったというより、理解を深めていかなければと強く感じた。各校の様子を聞くことができる機会になりよかった。中学校と小学校とのカッティングポイントの違いが話題になったが、北地区は義務教育学校になるので、こういうところでの交流もしないといけなと感じた。
- 中央小学校のシラバスの取組を詳しく聞きたいと思いました。東小の取組は勉強になりました。
- 教師だけでなく、子どもと理想の姿を共通にすることや、調整する場面を授業の中で設定することなどを意識して取り組みたいと思いました。また、通知表は激励の思いで配布する物か、実態を知らせる物かで、変わってくると思うので、なかなか難しいものだと感じました。
- 中学校区での評価の交流を進めたい。
- 一定の結論は出ず、「研修を深めよう」で終わった感じである。
- どんなオンライン会議でも遅くとも16:30には終了していますが、時間設定を再考してほしいです。カッティング・ポイントは管理職が変わったらすぐに変わったので、現場に下ろすものと上で決めることを区別してほしい。今回話し合われたような、市内の学校の基準になるようなものができたら、課題別学校間交流に必要性は感じないので、できるだけ現場の時間の確保に使わせて欲しいです。

【終わりに】「観点別学習状況の評価」や保護者への「評価結果の提供(通知表等)」については学校が定められています。学習評価は、どのような授業スタイル・指導を行うかということと密接に関連していますし、観点別学習状況の評価資料の一つのテスト自体の難易度も違う…。では、「カッティングポイントを統一」することは必要なのか、それにより評価・評定の信頼性は高まるのか。数値化された結果が評価資料の1つにされるのであればカッティングポイントの大ききばらつきは望ましくない…等々、考えさせられました。

学習評価は、授業内容や学習の進め方の妥当性を検証し、授業改善に生かし、児童生徒の資質・能力を育成することが目的です。学習評価によって児童生徒の資質・能力をいかに伸ばせるかが問われ、育成するという観点から評価の信頼性と妥当性が、今まで以上に求められているわけです。実践発表やグループ協議では、信頼性と妥当性を担保するため、学習指導要領の目標に準拠した評価規準を設定することや指導と評価の一体化を図ることの大切さに加え、今後取り組むべきことや要望が出されていました。評価方法を多様にしたきめ細かくしたりすればするほど教員の負担は増しますから、「効率的・効果的な学習評価の在り方」という観点も合わせて、次年度以降の検討課題です。(文責:船木)